

願いに生きよう

真城義磨

はじめに

おはようございます。今、紹介をしていただきました大谷中学校、大谷高等学校校長の真城と申します。同時に真宗大谷派の僧侶です。瀬戸内海の小さい島で、過疎と高齢化が進んでいまして、私が小学生の頃は小学生が三六〇人いましたが、今は小学校全部合わせて三〇人もいない、ついに昨年は、一人も赤ん坊が生まれなかつた、そういう小さな島の小さなお寺の住職もいたしております。毎週末にはそちらに帰つてお坊さんとして、このこと（願いに生きること）を実現したいと一生懸命やつて

います。京都では中学生、高校生に、このこと（願い）のために生きたいという、生きる意欲、エネルギーが沸き上がつてくるような人生になつてほしいと、いつもどの人に向かつても願つているということです。

今日、皆さんのがここにお集まりになつてしているのは宗教講座があるからですね。私たちをそこへ行こうという気持ちにさせるのは何か。どういうことがあると、そのことをやってみようという気持ちになるのかなと思います。スポーツをしたり、勉強をしたり、自分の好きな趣味のことをしたり、仕事に打ち込んだり、旅行をしたり、いろんなことがあります。私自身を動かしているものは何なんだろうかと少し考えてみました。それはやっぱり、やりたいことがあるのかないのか、このことを実現したいという願いが、あるのかないのかだと思いますね。僕の先輩で高校時代からお付き合いしている人がいて、その人の口癖はね、「自分は本当にやりたいこと一つやるために、イヤなことを百やる」。これを口癖のようにおっしゃる。その言葉を聞くと私もまた元気が出てくるわけです。本当にやりたいこと一つが、はつきりしているかどうかということですね。いろんなことに対しても、どうなんだろうか。今日は、そのあた

りを願いということを手がかりに考えてみたいなと思うわけです。

願 い

願いに生きよう

本当にやりたいこと一つをやるために、イヤなことを百やるというのは、本当にやりたい願いというものが少し遠いところに設定してあって、そのためには身近なイヤなことがやれる。今、やりたいことを我慢したり、やりたくないけれどもやるということもある。少し遠いところにある大きな強い願いのためには、すぐ目の前の願いを我慢する、すぐ目の前の願いを実現することよりも、今それを我慢することによってもっと大きなものを実現したいということなのかなと。そうすると私たちの持つ願いというものは、いくつか時間的に分けることができるのではないかなと思います。瞬間的な願いがあります。暑かったりすると涼しくしてほしいと思うし、おなかがすくと食べたいという、刹那的^{せつな}的な直近の、目の前の願いがある。それから今月中にこれだけやつておきたい、夏休みが始まるまでにはここまでやつておきたいという短期の願

いがある。二、三年のスパンで、卒業するまでにはここまでなりたいなという中期的な願い、もつと長いスパンでの長期の願い。それにさらに一生かかってでもやり遂げたいという願い。時間的に考えても五種類くらいに分けられるのではないかと思うわけです。

そうすると、どこに視点をおくかによって、今、自分はどうするかということが出てくるわけです。目の前のすぐの願いを優先するのか、いろんなことを同時に重ねあわせて考えていくことが必要です。私たちがいろんなことをしますね、しゃべったり、食べたり、動いたり、心で思うことも含めて、そういう根っこに願いというものがあるなと思いますね。あらゆる営みのベースに願いがある。今、皆さんは椅子に座っていますが、椅子は工業製品ですから、具体的に誰かの願いとすることがピンとこないかもしれないけど、これも願いがこもった椅子なんですね。あらゆるつくられたものには、つくり手の願いがある。もう何十年の前の話ですが、今からお話をすることは事実にもとづいていますが、わかりやすくするために、多少僕の脚色が混ざっているんですけれど。

寿司屋の思い出

願いに生きよう

小学校六年の時、私の家は貧しかったのでお寿司屋さんに行くなどということは一度もなかつたんです。それを不憫に思った、あるおじさんがお寿司屋さんに連れていつてくれました。お寿司屋さんのカウンターのところに座つて「何でも好きなもの注文しなさい」と言ってくれるんだけど、初めてですからわからないのでうろうろしていると、おじさんが、寿司屋の大将に「適当にみつくりつてこの子に握つてやつて」と言う。食べていると、しばらくしないうちに二人連れの男の人がお寿司屋さんに入つてくる。連れていつてくれたおじさんが座つていて、私が座つて、一つおいた隣に二人が座つた。寿司屋の大将が「いらつしやいませ」。おしほりを出した後、「お客様へ、何、握らせてもらいましょう」と注文を聞いたわけです。一人のうちの片方が、お品書きを指さして「おい、親父、高いやつから順番に全部握れ」。一番高いものは時価と書いてある。指さして高いものから順番に全部握れと注文する。寿司屋の大将

はびっくりして、上得意ですね。高いものから順番に注文してくれるから。「わかりました」と。「はい、トロ、はい、ウニ」と出すわけです。大将はニコニコなんです。二人のところにおいしいお寿司が出てくる。私のすぐ横におった人は、お寿司を人指し指と中指と親指で次々と食べる。食べて何番目かに来た時でした。その人がある寿司を一本の指でポンと撥ねてカウンターの下に落としたのです。値段の高いのから順番に握ってるんですよ。それを私たちが歩くところ、土足のところに高い寿司を落とす。一番びっくりしたのは寿司屋の大将です。すぐに見て「お客様、お嫌いなものがあるんだつたら、言って下さい。それをはずしてお好きなものだけ握らせてもらいますからおっしゃってください」。ところが、落とした男の人は「食べるか、食べんかはワシが決めるから、お前は黙つて順番に握れ。金は払うから」。金は払うから、お前が握ったやつ、捨てるかもしけんけど、握れと。皆さんがお寿司屋の大将だつたら、どう思うでしょうね。実はその人が最後にお金を払ったのかどうか見届けてないです。何となく店の中がシーンとして凍りついたみたいになつて、ポツリ、ポツリとお客さんが出でていって、私もおじさんと外に出たから、最後にお金を払ったのかど

うかは確かめることはできてないのですが。

もう四〇年近くたっているんですが、いまだにその光景は私にとつて忘れられません。お寿司屋さんはお寿司が商品ですから、お寿司を売つてお金と交換できればそれで経済活動としては成立ですね。お金はもらつた。だけれども握つた寿司を床に落とされた。場合によつては踏みつけられた。とすると、その寿司屋の大将は一生懸命寿司を握りながら「これは食べてもらえるんだろうか、ゴミのように落とされるんだろうか」と思いながら握るよりしようがない。気が気じゃない。その時以来、私はあらゆるモノというのはつくつた人の願いがこもつているんだなということを、ずっと思うようになりました。寿司屋の大将からすると、寿司を売るのが商売ですから、寿司が売れてお金に交換できれば、一日の売上が満たされるわけですから、それでいいことになるわけです、経済のことだけを考えればね。だけれども本当にそうなのかどうか。お金をもらうこと以上に、目の前の人がある「なかなか、いいネタ使つてるやん、うまいで、もう一個くれや」とおいしそうに食べててくれる。寿司屋のおじさんが、朝早く起きて市場に行つて魚を選んで仕入れてくるのは、全部、お客様においしく食べて

もらいたい、お客様に満足や喜びを持つてほしい、そういう願いがあるわけです。願いがあつて商売もある。お金をもらえることは大事なことだけれども、そこに願いが重なつていて、願いが実現するか、しないかということは、ある意味ではもっと大事なことなんですね。

服をつくる人

今はもう八〇歳を過ぎていますが少なくとも七五歳くらいまでは現役でやつておられた男性で、洋服をつくる、布を裁断する人がいました。私の故郷の小さな島の出身の人で大阪で働いている。その人は、はさみ一丁を持つていると世界中、どこへ行つてもそれで食べていいける。それだけのすごい腕前を持つている人です。その人が布を鋸で裁断してすばらしい服ができるわけです。その方が、お盆とかに大阪から島へ帰つてこられると、お寺を訪ねて来られて昔話をします。時々おっしゃるんですね。「布を断ちながら、裁断した布からできたこの服を、どんな人が着てくれるんだろうといつも

願いに生きよう

思う。その人がその服を着ることで、ちょっとうれしい気持ちになつたり、幸せな雰囲気になつたりしてほしい。その服は純真な乙女が着るんだからそのつもりで仕事しています」とおっしゃる。「汚れのない女性が着るものをつけているから、自分もそれにふさわしくないといけないと思う」と。実際に着ている人が純真かどうかは別として、そこにそういう願いがこもっている。私は学校の校長として生徒たちが制服をだらしなく着崩したりしているのを見ると、制服をデザインした人、制服をつくっている人たちのことを思つて、私自身も辛くなるものがあるわけです。

つくる人の願い

あらゆるものには皆、願いがこもつていて。皆さんが座っている椅子の背もたれや座面のクロスを刃物でずたずたに切り刻んでしまったら、その製作にかかわった人から見れば、とつこの昔に納品して、お金の支払いも済んで関係ないかもしれないけれど、心が痛む、辛くなる。そういうことがあるわけです。あらゆるつくられたものは

みなつくつた人の願いがこもっているんだ、皆さんが着ているものもそうだし、履物もそうです。みなそなんだということですね。

それから、ものそのものの自身が成りたがっている願いというものがあるのではない
かと思つたりします。小さな子猫や子犬は犬や猫になりたがつてあるなと思いますね。
人間の子どもは人間になりたがつてある。子どもは人格の完成した一個の人間になり
たがつてあると思いますね。芥川龍之介の書いたもので、運慶だったと思いますが、
仁王さんや仏像をたくさん彫った彫刻家がいます。その運慶が図面もなくして、いきな
り大きな丸太に向かつて鑿のみを入れていく。それを見た人が「なぜそんなことができる
のか」と聞くわけです。運慶は「この丸太の中に仏様がいて、外に出たがつてあるか
ら、その声を聞いてその通りに彫るだけなんです。材の中に仏様が、こうなりたいと
いうのが私には見えるんです」と答えてる。そのようなものがあるとするならば、
私はどうなりたくて生まれてきているのかとも考えてほしいと思います。

ものだけではありません、作曲された歌もそうです。バッハのもの、ビートルズの
ものなどはオリジナルで演奏されることもあるし、さまざまにアレンジされ、編成を

願いに生きよう

変えて演奏されたり、違う歌詞をつけたりする。そうすると、もとのオリジナルが持つてある願いがあつて、それに私はこう表現したいという願いが重なつていって、また新しいすばらしいものができていく。そんなこともあるのではないかと思います。作曲されたもの、編曲されたものに、自分はこう演奏したい、こう歌いたいという演奏する人の願いが重なつていく。そんなところも音楽を聴いたりする時、そこを聴き取つていこうとするとまた感動が新たになるのではないかと思います。美術品もそうだし、文学作品もそうだし、映画もそうです。表現されたものには必ず、その表現の根っこに願いがある。何が言いたくてこの絵を描いたのか。この絵の中に何を隠しているか。皆さんも一人ひとりが生まれてから今日まで、いろんな人から願いをかけられて生きてきたことがあるのではないかと思います。

四 食

仏教の教えの中で人間に生まれたものが人間になるために四種類の食べ物を食べな

ければならないという「四食の教え」があります。人間に生まれたものが人間になつていくためには四種類の食べ物を摂取しないといけない。まず「段食」と言います。

「段」とは一まとまりの意味ですから、段食は、朝御飯、昼御飯とかを表す。さまざまに生きているものをいただいて摂取して生きる。そういうことをしなければ生きていけない。私たちはちょっと今まで生きていたものしか食べられない。さまざまな動物がいのちを生きている。それを中断させて私の中にとりこんでしまう。それが段食です。次に、人間はカロリーと栄養のバランスだけで成長するわけではない。それが「識食」。人間はいろんなことを知り、学ぶ。人間はいろんなことを学ばないと人間になれない。学校で習うことだけではありません。ご飯の炊き方、さまざまな動植物の育て方、人間付き合いとかいろんなことを学ぶ。学ぶことを食べ物として摂取して人間は人間になっていく。そして人間はしつかり食べさせてしつかり勉強すればそれだけでいいか。そうじやない。三番目は「触食」です。ふれあい、スキンシップ、人間関係。人間は、いい人間関係、愛情のある人間関係の中に身をおかないと人間になれない。いくら、いい完璧な食べ物を用意して完璧に勉強することができても、孤立

願いに生きよう

して一人だけにして育てたら豊かな人間性のある人間になつていかない。人間の中のふれあいがいる。ふれあいという食べ物。人間の愛情に触れる、そういうものを吸収して人間は人間になっていく。最後の四つ目は「思食」。誰かが私のことを思つてくれている。願いがかけられている。人間は誰かから願いをかけてもらって人間になることができる。こういう考え方です。

四食の内容について、オリジナルは少し違うんですが、私たちの先輩が拡大解釈したものを使わせてもらっています。皆、願いがかけられているということです。私が願っていることがあると同時に、私自身がさまざまに周りから願われている。今ここにいらっしゃる皆さんの中で、たとえば誰かが病気か事故で亡くなられることがあった時、その人のお葬式に誰も来てくれないことはほんとありません。お葬式に来てくれた人は、その人のことを偲ぶ人ですね。かかわった人、その人たち皆、その人に願いをかけています。そういう関係の中に私たちはいるんだということを考えてほしいと思いますね。

私という人間は、プライベートな一個人であるだけではないのですね。さまざま

人から願われ、さまざまな人から大事に思われ、さまざまな人から気に掛けられています。パブリックな人間でもある。公性を持った個人なのだとということです。そんなことも考えてほしいと思います。自分はどういう願いをかけられているか。それと自分自身が思っている願いはどうかわっていくのか。そんなことも考えてほしいと思います。

心の願い・身体の願い

いろいろ考えてみると、人間にはいろんな願いがあるんですね。頭脳が考える願いがあります。身体が要求する願いがある。ある時、ふつと思いましたけど、私は右利きですが、もしこの私の左手が私に向かって何か願いを言うとすれば「お前は、自分を使つてくれなかつたじゃないか。右手ばかり使つて左手を使わなかつたために器用に動かすことができなくなつた。持ち主のあなたが右も左も平等に扱つてくれれば左手はもつと動くことができたのに」と、ひょつとしたら言うかもしれない。考えたこ

願いに生きよう

とはないかもしれません。自分の足の裏が自分の願いを伝えるとすれば、どんなことを願うか。自分の内臓が自分に願うとしたらどんなことを願っているか。いろいろなことがあるのではないか。身体が願つてることつてあるんです。身体が切実に睡眠を要求している時に、私がテレビを見たいという日の前の願いを実現するために、それを妨げる。そうすると身体の中でアンバランスが生まれてきていろんなことがうまくいかなくなることがあります。身体が願つてること、心が願つてること、心のもう一つ奥に、いのちそのものが願つていることもあるんです。それはもつと根っこのところにある。

心が大変苦しくなることがあります。心の願いとしての「生きていく」ということに結びつかなくなつて「こんな状態で生きていてどうなるか、死んでしまいたい」と思うことが人間にはあります。その時にこういう死に方をしたいと人間は思うわけです。私の心が自殺を決心して、どこで自殺をしようかと考えて、あそこで死のうと思つて移動している途中に車にはねられそうになつたらどうするか。自分の心は死のうと決心して自殺しようと動いている最中、急に車にひかれそうになつたら咄嗟^{どうさ}に身体

はどう動くか。身体の願い、いのちの願いは、頭脳や心の願いと違う動きをする。危険を回避する方向に必ず動く。どうせ今から死ぬんだからここで車にひかれたらいいじゃないか。火傷しそうなものに触れたって、大火傷したっていいじゃないか。そんなわけにいかない。熱いものに触れればピュッと手が引っ込む。何か落ちてきいたらパツと避けようとする。そういうふうに動くわけです。阿蘇山の噴火口から飛び下りようと思つて、噴火口のそばまでいつて淵のところで下を覗き込んでる時、誰かが後ろから押したらどうします。せっかく飛び込もうとしているのだから「ありがとう」と言つて行くか。行かないんです。必ず腰を落として足を踏ん張つて落ちないよう頑張ります。それは何かというと、いのちや身体は自分が死ぬということを全く願つていなかることですね。

皆さんの身体の中ではいろんなものが一生懸命に動いています。血液が身体中を循環しています。リンパ液も動いています。空気が出たり入ったりしている。朝食べたものを消化している。少し前に食べたものを吸収している。あるいは暑ければ体温を下げるために皮膚の表面に汗を出して気化熱で体温を下げようと身体が動いています。そ

願いに生きよう

の身体の願い、いのちの願いはただ一つ、「生きる」という一点です。身体中は必ずいつも、生きたい、私に向かって生きてほしいと、今まで一度も疑うことなく願つている。実は去年の今頃、脈が自分で変だなということがあつて、六月初め頃、ある人に心臓の名医を紹介してもらつて行つたんです。「あなたは不整脈だから二四時間、脈を記録しましょう」。弁当箱のようなものをぶらさげて、身体にべたべた電極を張りつけて二四時間、心臓の鼓動の記録をとつた。それを翌日九時ごろ、持つていくと、外してコンピュータにかけるわけです。またたく間にデータが出てくる。お医者さんが言うわけ。「あなたはこの二四時間の間に、十万五千七百何十回脈を打っていますね。そのうち七百何十何回不整脈がありますよ。時間帯はいつ頃ですか」。すぐ出るんです。最初は「そうか七百回も不整脈があったのか」と思つていると、医者は「これは心配ありません。そのくらい誰もあるので、千回超えない」と治療は必要ありませんよ。それを言つられて安心して改めてびっくりしたのが、二四時間の間に十万回以上も心臓が仕事をしていた。去年のその一日だけの話ではないのですね。その時、五〇歳でしたから、五〇年間、一日の休みもなく心臓がただ一点、生きるという願いの

もとで自分の身体中に血液を送り続けている。ただの一時も休んだことがない。そういう身体から、いのちから発信される願いがあるにもかかわらず、私たちは頭脳の願い、心の願いのところで迷つたり、悩んだり、元気がなくなつたりするのじやないかなと思います。

去年から今年の春にかけて「世界に一つだけの花」というS.MAPの歌が大変たくさんの人々の共感を呼びました。他人と比べてナンバーワンになる必要はない。もともと世界に一つだけのオンリーワンのあなたなんだから、オンリーワンを大切にすればいいということで、多くの人が楽になつたようです。ただ私からすると、そのオーラー、ワンの花はどこに咲くのかも考えてほしい。オンリーワンの花は誰の力と何の力によつて咲くのか。そんなことも考えてほしいなと思うわけです。

二つの願い

仏教で願いを二つに分けます。一つは「通願」、あらゆる人に共通する願いです。

願いに生きよう

どの人にも共通する。もう一つは「別願」、私の個別の願いです。私がこうなりたい、私がお医者さんになりたい、こういうことを実現したいという、私としての願いです。しかしその別願は、必ず通願の上にしか成り立たないのです。通願とは人類共通の願いです。あらゆるいのちあるものの共通の願い。具体的にはどういうことか。どのいのちもいきいきとつながりの中で生きてほしいということです。この頃、思うんですけどね、いのちというのはどういうふうに定義すればいいのかな。私は中学生、高校生相手ですから、中学一年生にいのちのことをどう説明すればいいのかなど考えます。現在はこう言っています。つまり「生きたいと願っているものることをいのちと呼ぶ」。あらゆる動物も植物もそうだと思うんです。そこで、生きたいというのは、具體的にはどう生きたいのか。皆さん方も光華女子学園に身をおいているは何のためなのかな。そこでの教育を通してこうなりたい、あかなりたいというものがあるに違いないと思います。勿論この学園が持つてている願いがあります。学園の願いは通願です。どの人にもこういうことを理解してほしい、こう育つてほしいという願いだと思います。その上で皆さん方の一人ひとりの個別の願いとどう折り合いをつけるか。どう重

ねていくのかということが大事なのではないかと思いますね。

通願というのはどの人にも生きてほしいということですね。しかもいきいきと生きてほしい。そしていのちは皆つながっているのだから、つながりの中で生きてほしいということなんですね。今、イラクやアフガニスタンやイスラエルや、あちこちで大変な殺戮が行われています。そういう報道を聞いた時、自分の関係者でもない、利害もない、顔も知らない、名前も知らない人なんだけれど、そういうところで自爆テロがあつて何人が亡くなつたと聞いただけで、私たち、どこか辛い、悲しいですよね。それはなぜかというと、頭脳のところで言うと、利害とか論理的なことでいえば私が悲しむ必要はないんだけれども、いのちそのものがね、それを辛く感じる。それはなぜかというと、いのちがつながつてているからだと思うんですね。誰か友だちがイヤな思いをしている。いじめられている。無視されている。仲間はずれにされている。差別されているというのは、大変辛いでしょう。それはなぜかというと友だちのいのちと私のいのちがつながつてているからです。そのつながつてているいのちのどこかが傷つけられたり、辛い思いをしている限り、自分自身もすつきりと楽しくなれない。そう

いうことは私たちの経験の中で日頃あるのではないかと思います。

下方比較

つながっているということなんだけど、そこはなかなかピンとこなくて、他人はライバルに見えたりする。それはなぜかというと、私たちが自分の中に喜びや満足を持つことができるかどうかにかかるんですね。「下方比較」という言葉があつて、私たちは下の方と比べたがる。人間は自分の心の中から、自分の内側から喜びとか満足とか、そういうものが出でこなければ、下方比較をする。明らかに自分より劣っている人、明らかに自分より気の毒な人、明らかに自分より低位な人を探すんです。探して見つけて、その人と比べて自分がましだということを確認しないといったまれない。自分も大変だけど、世の中にはあんな気の毒な人もいるんだから、まあ、そういう人と比べたら私なんかまだましな方だと思わなければね。アフガニスタンの人たちと比べたら、私の生活なんて、これでもイヤなことたくさんあるけど、幸せだと思わ

ないとね。こういうのを下方比較と言う。

私が幸せになるためには、明らかに自分より困っている人がいてもらわなければ、自分の幸せが確保できない。私たちは比べる世界で生きていく限り、どうしてもそうなってしまう。それが差別というものになっていくわけですね。差別の固定化につながっていくわけです。誰か自分より明らかに気の毒な人、恵まれない人がいないと自分の幸せが確認できないという、大変みじめな姿ですね。自分自身の中に、他人と比べる必要のない喜びや満足があれば、何もそういう必要がない。では自分の喜びや満足はどこから得られるかというと、皆さん方の中にどういう願いがあるかということだと思います。私が私として何を願うのか。私が私として、他のあらゆるいのちとながりながら、このことを実現していきたいという、それは何か。それがはつきりすると、僕の先輩のように「本当にやりたいこと一つをやるためにイヤなことを百やる」となる。これはいろいろに解釈できます。イヤなこと百くらい乗り超えないと本当にやりたいこと一つは実現できないと解釈できるかもしれません。が、本当にやりたいこと一つに向かって進んでいる時は、イヤなこと百くらい、全然、イヤでなくな

願いに生きよう

るんですね。そういうことで言えば、今、皆さんのが、新しい年度が始まつて一月たつたところで、今年私は何をするのか。今年をスタートとして私の人生にかかわつて何をするのかを、途中で変わつてもいいから、一度きちんと決めるということです。そしてそれを言葉にするということはとても大事です。

わたしたちの願い

さまざまな仏様は一人の例外なく皆、菩薩^{ぼさつ}という時代を経験するんです。菩薩といふ時代を経験し、その菩薩の時に何をするか。誓いを立てて修行する。「誓願」と言います。今日の最初に唱和しました三帰依文の真ん中に「自ら仏に帰依し奉る」とあります。その次です、「まさに願わくば衆生^{しゆじょう}とともに大道^{だいどう}を体解^{たいが}して無上意^{むじょうい}を發^あさん」。一つ目は「自ら法に帰依し奉る」。「まさに願わくば衆生とともに」というのは、私だけ一人が実現できればいいということではない。どの人ともともに、常に「ともに」ということが意識されるのが、菩薩の特徴です。「まさに願わくば衆生とともに、

深く経蔵に入りて、智慧海の如くならん。海のように限りのない知恵を身につけたい。三つ目は「自ら僧に帰依し奉る。まさに願わくば衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん」。「碍」というのは障害物、妨げです。「あれがあるから私のこれができない」「これがあるから、私の願いが実現できない」と思つてはいる壁のことを碍と言います。ところが、願いがはつきりすると、今まで碍だと思っていたことが無碍になる。「無碍」は困難を乗り超えることができる、そういう意味じやないんです。無碍は今まで自分の行く手を阻んでいたもの、邪魔していたものが、邪魔ではなくなつてくる。「あの人気がいるから私はできないのよ」と思つてはいる、その「あの人」が実は私にとって、とっても大切な人だった」と見えてくる。それが無碍です。

親鸞という人は「念佛者は無碍の一道なり」とおっしゃった。無碍はどんな障害も乗り越えることができるということではないのです。自分が今まで、これがあるからできないと言い訳にしてはいた、そのことが実は自分を育ててくれる、とても大切なことだった。イヤなことはいっぱいあります。思い通りにならないこともあります。病気にならなければならない、怪我をする。貧乏する。友だちと争う。いろんな

願いに生きよう

なことがあります。皆さんには実感がないかもしれません、数十年すると歳をとるということの辛さに直面しなければならない。ついこの間までここまで上がつていた手が、今はここまでしか上がりがない、ということを引き受けていかなければならない。長年連れ添った自分のつれあいのお葬式を出さないといけないという、死に直面しなければならない。自分を可愛がつてくれたお母さんとお別れしなければならない。おばあちゃんとお別れしなければならない。自分自身が死んでいかなければならない。そういうのは皆、自分の目標実現の妨げだと思っている。だけれども、私たちがもう少し違うところに立つと、それが私を育ててくれるとしても大事なことに見えてくる。自分のいのちに限りがあるから自分のいのちが輝く。自分の人生が思い通りにならないことの中で、私たちはいろんなことを学び、自分自身のものの考え方が深くなつていく。濁つた考え方が澄んでいく。そういうことがあるんですね。

今まで「このことがあるから私はできない」と思つてることがいっぱいあると思いますけれど、そう思つてゐる限り、なかなかできないんですね。今、皆さんが何か一つでいいから、とにかく決めることです。私はこれに向かおう、私の顔はこっちを

向くのだと、何か決める。はつきりと決める。はつきりと決めると世界が変わつて見えてくるんです。願いがはつきりすると、元気も勇気も出てくるんです。「このこと一つはどんなことがあっても自分は一生かかっても実現するぞ」というものがはつきりすると、生活の中のあらゆることが全部それにつながるんです。ご飯を食べるのも、夜、睡眠をとるものもそれにつながるんです。自分の身体が丈夫になつていき、体力がついたりするのも全部つながるんです。今日一日勉強したことが全部それにつながつていく。友だちとしゃべったこと、学校の行き帰りに見たこと、びっくりしたこと、腹が立つたこと、わからないことも含めて全部それが自分にとつて必要なことだった。自分が本当にやりたい一つを実現するために、つながっていくことなんだ、というふうになるんです。そうなれば、もうほつておいても進んでいきます。自分で努力しよ、頑張ろうと思う必要はないですね。ありとあらゆるものがあ面白くなつて、ありとあらゆるものが、これもあれに使える、あそこにつながるということになる。そのためには本当に自分がやりたいことは何なんだろうかと自分の中にはつきりさせることが大事ですね。

願いに生きよう

自分の根本の願いは何なんだろうか。自分の本当の願いは何なんだろうかということがあります。また目の前にすぐやりたい願いもあります。それからここ数週間、数か月の間に実現したい願いもあります。数年の間に実現したい願いもあります。だけど一生かかってもこれをやり遂げたいというものを早くはつきりさせると、元気も勇気が出てきます。私たちはなかなか本当にやりたいことが見つからないために、一步が踏み出せない。身体が前に進まない。今、自分がやっていることの意味がはつきりしない。何のためにご飯を食べるんだろう。何のためにこの授業を受けているんだろう。そんなことになってしまふ。それが願いがはつきりすれば、あらゆることが変わつてくる。その願いは通願と別願の両方あることも考えてください。オンリーワンの花を咲かせるのが別願、皆さん方一人ひとりが自分の花を咲かせてほしい。その花が咲く大地がある。そこで黙つて、皆さん方一人ひとりに対し、オンラインの花を咲かせてほしいと願いながら応援している働き（通願）というものがある。そこに安心するということです。

帰依する。「自ら仏に帰依し奉る」と唱和しました。「帰依」というのは、中学生に

もわかりやすく言いかえると、「大丈夫、心配しなくていいよ、安心して」ということだと思います。自ら仏に帰依し奉るということは「仏様を信じて間違いないよ、大丈夫だよ、心配しなくていいよ、安心して進んでいけるよ」。自ら法に帰依し奉る。「仏陀、目覚めた人が私たちに残していくべきは真実の教えというものがあるよ。そのことに安心してそれを頼りにして生きていけば心配ないよ。必ず道は開けるよ」。そういうことが、「自ら仏に帰依し奉る。自ら法に帰依し奉る」。三つ目の「自ら僧に帰依し奉る」というのは「同じ目標に向かって、同じ方向に向かって進んでいる友だちがいるよ、いのちは皆つながっているよ。そのつながっているいのちに安心しているよ」。その上で「あなたはあなたでいいですよ」ということですね。

生まれたことの意味

お釈迦様がお生まれになつた時に七歩歩かれて、天と地を指さして「天上天下唯我独尊」とおっしゃつた。なんでそんなことが現在まで伝説として「五〇〇年も国を超

願いに生きよう

えて伝わってくるのか。「唯我独尊」は「ただ我ひとりにして尊し」ですから「あなたは、今のあなたそのままで尊い人なんですよ」ということです。この講堂の中に尊くない人は一人もいないんですよ。殺されていい人は一人もいない。差別されていい人は一人もいない。傷つけられていい人は一人もいない。逆に人を傷つけていい権利を持つている人も一人もいない。人を殺すことの許されている人も一人もいない。どの人も皆、尊い。どの人も皆、この世に生まれる意味があつて、目的があつて生まれてきている。皆さん自身もそうなんですが、生まれた瞬間に人間は何をしに生まれてきたか忘れるんですね。人間は皆、生まれたくって生まれてきているんです。生まれたくって生まれてきていないと私は思っています。どの人も皆、生まれたいから生まれてきている。ところが生まれて世間の空気を吸った瞬間に忘れちゃうんですね。自分が何しに生まれてきたのか。自分が一生涯かかってやることは何だったのか。それを一生懸命思い出そうとしているのがこの大学での学びであつたり、日々の生活の中にいろんなことを経験しながら「私の人生つてこのことのためにあつたのかもしれないな」ということがあるかもしれません。

皆さんは、いろいろ勉強される時、自分のことを空っぽのBINのように思って、空っぽのBINをいろんな知識で早くいっぱいに埋めればいいと思つていたらそれは間違いです。そんなものはBINがこけたら皆、出ていつちやう。BINが割れるかもしれない。そんなのではないんですよ。皆さんの中にすでにすべてあるんです。すべてあるものが、教えてもらうことでうまく出てくる。皆さんは、私もそうですが、自分の持つて生まれた能力の何を知つていて、何を活用しているか。人間の遺伝子の九七%は一生涯眠ったまま終わつてしまふと言われます。走るのが得意な人がいる。泳ぐのが得意な人がいる。計算の得意な人がいる。しゃべるのが得意な人がいる。いろいろいます。その素質は全員がほぼ同じように持つていて。そのどれにSWITCHが入るか。そのどれが活性化するかによつて、出てくる姿が変わつてくる。皆さんの中に文学に关心が深くなつて、SWITCHがどんどん入つていつて活性化する人もいると思います。生活とか子ども、いろんなことに关心が向いてそこにSWITCHが入る。何でもいい、何かにSWITCHが入り始めると連鎖的にいろんなことにつながつていくんです。いろんなことがつながつしていく。今、この学部に入つてみると、小学校、中学校、高校で

願いに生きよう

習った数学は何の役にも立つてないと思っている人は不幸な人です。全部つながっているんです。皆さんやりたいことに。それは具体的に見える形でわかりやすくつながっているとは限りませんけれど、そのことは全部、皆さんの今になつてているということだと思います。

本当の願い

仏様から私たちには願いがかけられている。どういう願いか。「あなたはあなたとして、あらゆるいのちとともにいきいきと生きてほしい。あなたは尊い人に生まれているのだから、その人生を自分で尊く生きてください。自分の尊さに早く気がついて、自分で自分を捨てないでくださいね」。そういうことがあるのですね。この講堂の中にも身体もいのちも全部が生きたいと願つていらない人は一人もいない。おなかがすくのは身体が生きたいと願つている証拠なんです。喉が乾くのも暑いと感じるのも、そう。蚊に刺されて痒いのも、そう。生きている証拠なんです。生きようとしている

証拠なんですね。私たちの中によりよく生きたいというものがいっぱいある。出たがっている。そういうものを自分で見つけて、自分でスイッチオンにしてほしい。

願いということを考える時、願いが実現した時が素晴らしいと今までの途中は大したことないと思うことがあるとすれば、それは間違いですね。私たちは人生の中で最高の瞬間はいつも今なんです。次の瞬間ではない。今なんですね。今、いつもピーケーにいて、今が一番すばらしいんです。そのことは願いがはつきりして、それに顔が向いて、実現していく手応えの中から、今のすばらしさを感じられるようになる。「そのうち」とすぐ思うけれど、今が一番いい時なんですよ。ところが今の自分のよさを自分で見つけることができないかも知れない。今、とてもすばらしい瞬間を経験している最中であるにもかかわらず、今のすばらしさを自分できちんと掴む^{つか}ことができないかもしれない。それが本当にやりたいこと一つをはつきりさせると、全部集約されていく。そうするともつと健康になりたいと思うし、自分の中の優先順位がはつきりしてくる。大事なものの順番がはつきりしてくる。そうすると、今まで気になっていたことの順位が下がる。もっと大切なことにエネルギーを注ぐことができる

と世界が変わります。本気になると世界は変わるんですね。それを経験してほしいな
と思います。

今これがないから、あるようにしたいと思う。しかし、ないすばらしさもあるん
ですよ。まだこれができるいないということのすばらしさもある。実現した時だけがす
ばらしいと思うけれど、足りないという状態のすばらしさもある、足りないという状
態から学ぶこともいっぱいある。最近「あるがまま」ではなく「ないがまま」という
言葉が言われますが、ないのもいいんですよ。我々は、ないのは不足であつて、満足
しない限りだめなんだと思っちゃいますけれど、そうではないということです。

自分の中の願い、根本の願い、自分で気がついていないかもしれないけれど、皆さ
ん方の中にいきいきと生きたい、つながりながら生きたい、私として生きたい、私が
人生の当事者として生きたいというものが間違いなくあります。そのことに安心する、
そこをはつきりさせる。少なくとも私たち仏教の教えの中に身をおくものからすると、
仏様はどの人をも皆、肯定しているということです。「あなたは、今のそのあなたが
とてもすばらしいんですよ。あなたは何の条件もなく自分のことを好きになつてい

ですよ。自分は素晴らしいと思つていいですよ。あなたはすでに尊いのですよ」。そこからスタートしてくださいといふことが、私に呼びかけられているんだということです。仏様から願いがかけられているということです。私たちはいつも悩みます、迷います、うろうろする。他の人と比べて「ああだといいな」と思う。「こうだからつまらないな」と思いますけれど、仏様はいつも私たちに向かって「今のそのあなたは、あなたとして尊いんですよ」という呼びかけをしてくださる。

願いをはつきりさせる、そうすると決心がつきます。これをやろうと、そうするとあらゆることがそこにつながつてくる。そうすると勇気が出てきて元気が出てきて、その願いは実現していくんですね。願いといふものはちょっと目の前のああしたい、こうしたいということと、根本的な願いと両方あるんだということですね。今、目の前のちょっととした願いを実現するために根本的な願いの実現が遠ざかたりすることもあります。そういうことをちゃんと考えようとするならば「私は誰なの?」ということから始まるのかな。「私はなぜここにいるのか。本当に私がしたいことは何なんだろうか。私が人間になりたがっている、その人間はどんな人間なんだだろうか」とい

願いに生きよう

うことをいろいろ膨らませて考えてほしいと思います。仏様の言葉を聞いて、仏様の願いを受け止めることによって、あらゆる困難を困難とせずに、いきいきと人生を生きた先輩方がいます。仏教だけではありません、キリスト教の中にもイスラム教の中にもヒンズー教の中にもたくさんいらっしゃいます。私たちが生きる知恵というものをいろんな場面で学んで、今の自分のすばらしさ、尊さを改めて認識してもらえたらありがたいなと思います。

本当にやりたいこと一つが見つかると、イヤなことの百くらいは楽々乗り越えられる。引き受けられる。そういう世界が広がります。

以上とさせていただきます。どうもありがとうございました。

—二〇〇四年五月二六日—